

—シラ35章・15b-17、20-22、2テモテ4章・6-8、16-8、ルカ18章・9-14—

(そのとき、)自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対しても、イエスは次のたとえを話された。「二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派の人で、もう一人は徴税人だった。ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った。『神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。』ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようとせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください。』言っておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」

—ルカ18章—

信仰の完走者

パウロは死を前にして、皆から見捨てられながらも歩んできた自分の人生を「幸い」だったと弟子のテモテに遺言しています。

パウロが言う『幸い』とは、この世が与える栄誉ではなく、イエスに従う『信仰の道』を完走した歩みのことで「今や、義の栄冠を受けるばかりの幸いです。」

信仰の道とは、自分を生きるのではなく、聖霊を戴いて神の心で生きることです。

能力があり、手腕があつて、世の栄冠を受ける人は多いですが、創造主に支えられた存在であることに気づかず、自分が讃えられることで満足するといったこれら、目の見えていない人間の傲慢さほど、神の前に空しいものはないでしょう！神なくして私たちはすべて、無に帰す存在だから

です。

幸せを求めて生きていく私たちですが、その幸せには、本物と偽物があることをわきまえないで、やがて、すべてが水の泡となる空しい人生で終わる日が来て、その時気づいても遅いのです。

福音記者ルカは、神により頼むしか救いのない弱く貧しい人々への、キリストの優しさを特別浮き彫りにさせています。

ファリサイ派が指摘するような、奪い取る者、不正な者、姦淫を犯す者、徴税人のような「罪びと」であつても、神の前に「私は罪びとです」と、目を上げることも出来ず、ただ哀れみを乞う心の貧しい人に、イエスは天の国のしるしを与えるのです。世が与える栄冠を得て、聖霊に扉を閉ざしている人の心に、神は入ることはできませんが、自分の

ありのままを差出し、神に飢えて小さくなっている人の心には、主は自由に入ることが出来、その人は聖霊を得て、真の幸いを体験します。

信仰者の皆様！

パウロはイエスに做つて、世の勝利者になることではなく、私たちに「信仰の道」の完走者を目指す事をすすめています。

私たちも完走者となるために、自分の好む価値観で腹を満たす事より、へりくだって、神に飢えている心の貧しい人でありたいものです！

2022年10月23日

主任司祭 昌川信雄

